

ねこまた

「博物館だより」のうち

川村
優理

まりさんは、博物館の学芸員です。町に残されているいろいろな物を調べ、博物館の展示室で展示するのが、まりさんの仕事です。町に残っている古墳や、お寺などを解説しながら案内することもあります。

町といっても、まりさんの住んでいる町は、山と山に囲まれた小さな盆地にあります。観光のガイドブックなどにものっていない、いなかの町です。

町を出て都会に行ってしまう人もふえした。「あきや」、つまり、だれも住んでいない家もあちこちにあります。人が住んでいない家は、どんどんいたみます。そのままほうっておくと、屋根や壁がくずれ落ちて、知らない間に、中に、動物が住みついてしまうこともあります。

何十年もあきやになっている家は、新しく住む人を捜したり、おしゃれなレストランやカフェに改築して、なんとか活用しようとはしますが、そんなにはうまくいきません。しかたなく、家をこわしてしまうこともあります。

まりさんは、学芸員なので、古い民家を改築したりこわしたりする前に、家にある物を整理し、調査しなければなりません。

古い家の倉や屋根裏には、珍しい本や、書き付けや、手紙。美しい絵などが残つてることがあります。ほこりの中から、ぼろぼろのまき物などが見つかって、それが、貴重な地図であったりすることもあります。

まりさんが今担当しているのは、唐橋通りからしという古い町並みの中の一軒、高田家です。高田家は、江戸時代、唐橋通りで薬屋を営んでいました。住んでいる人はもうだれもいません。唐橋通りの真ん中にあるので、町が買いつつて、なんとか活用しようとしています。特に古い建物ではないという理由で、家をとりにこわして駐車場にするという計画も進んでいます。まりさんは、こわさないでほしいと思つているのですが。

「やっぱり、駐車場にするべきですね。」

高田家の土間で、紙コップのコーヒーを飲みながら、建築士の森本さんが言いました。森本さんは、まりさんといっしよに、高田家を整理し、古い家をどうすれば活かせるか、建築の面から考えている人です。

「唐橋通りには駐車場がないです。古い物にこだわればかりいては、前に進まない。」

まりさんは、高田家の壁にかけてあったこわれた柱時計や、ひびわれた火鉢や、さびた缶など、どれも捨てずに置いています。昔の家がそのまま町にあつたら、訪ねてくる人たちはきっと楽しいだろうと思うので、一つ一つをたいせつに展示しています。

「古い物が好きというだけじゃないの。この家を残しておきたい理由は、まだあるんです。ろうかの格子戸の角が切り取られてあるでしょ。ちょうど猫一匹が入りできるくらいの大きさでね。で、その上の部分に『ねこまた』って文字が書いてあるの。だれが書いたのかしら。家をこわしてしまつたら、この小さい穴もなくなってしまうなと思うと、なんかさびしいの。」

「ねこまた、ですか。」

森本さんは、スマートフォンを取り出し格子戸の穴の写真をとると、ねこまたということばを調べました。

「なんかこわいですよ、それ。ねこまたというのは、妖怪です。長生きしすぎた猫が妖怪になると言われていて、こんな古い家だと、そういうのがほんとに住んでそうです。しつぽが二本。いきなり巨大になって、人を食い殺すこともあるそうです。おほらいをして、この家をさっさとこわしましょう。」

外に出て行くこうとした森本さんの足下をすりぬけるように、玄関から一匹の猫が入ってきました。

「え？ねこまた…まさか、ただの猫だよな」

茶色と灰色のぶちの猫は、小さくて、妖怪などには見えませんが、しつぽが二本ありました。

まりさんは、きゃあつと叫んでとびのきました。森本さんは、とつさにそばにあった棒切れを持ち、まりさんの前に立ちました。

ねこは、後ろ足でひょいと立ち上がると、にんまり笑って言いました。

「当たり前。この家に住んでるねこまたさ。」

ねこまたは、たたみの上にぎぶとんを三枚並べ、二人を手招きしてから、その内の一枚の上にとかりと座りました。

「こわがらなくてもいいさ。あんたたちを食い殺したりはしない。だって、この古い家や町をだいじにしてくれてるのはいつも見てるからね。」

森本さんは、かまえていた棒切れをおろしました。

ねこまたはぎぶとんの上にきちんと座り直すと、改めて、おじぎをしました。

「妖怪ねこまたです。名前は又造。猫の又造。りやくしてねこまた。この名前のせいか、つい長生きして妖怪になった。ふだんは、人には見えないはずだ。もう四百年くらいの間、唐橋通りの番をしてる。どろぼうにはいろいろとした奴とか、いたずらで火をつけようとしたやつをこらしめるためだ。いつもは普通の猫みたいだが、こうして、でかくなれば、こわいものはない。」

ねこまたの目が、とつぜん、真っ赤になったかと思うと、からだがいーんと大きくなりました。まるで虎のようなするどいきばです。前足をどんと踏むと、古い家はがたつとゆれました。

「わ、わかったから、元にもどってくれない。わたしは学芸員の山岡まりです。この家にある薬の資料を博物館にもって帰って、調べさせてもらいたいと思います。すばらしい資料があります。」

「おれは森本安彦。唐橋通りを伝統的建造物群として登録していこうとしています。唐橋通りを、日本中の人に知ってもらいたいんだ。そうだ、ここに住んでるねこまたのことも紹介したいなあ。」

話を聞きながらねこまたは、空中で一つでんぐり返しをして、また、小さい猫になりました。

「なるほど、そりゃあ大変な仕事だ。古い家にはおれみたいな化け物がいたりするから、一軒ずつ、話をつけておいてやるう」

「そいつはありがたい。よろしくたのむよ。で…」

と、森本さんは、「ねこまた」と書いた格子戸のすみの穴を指さしました。

「前に調査したとき、あの穴がなかったように思う。」

「江戸時代への通り穴さ。今日はあいてるから、のぞいてみな。」

ねこまたがするりと穴をくぐったので、まりさんと森本さんが穴をのぞきこんでみました。

家の中をひゅーっと風が走りぬけ、空気が、ふいにしめった匂いになりました。と、思うと

——「ごめん。」

玄関から、着物を着たさむらいが入ってきました。

「いつもの薬を買いに来たのだが。」

さむらいは、どこか、森本さんに似ています。同時に、女の人も入ってきました。こちらはまりさんに似ていました。

「お宅の猫の又造が、うちの子どもの風車を持って逃げたんですけど。あら、お店に投げ出してあるわ。」
土間は薬屋になっていました。小さい風車が落ちていて、そばには、「万能薬」と書いた黒い看板や、茶色い紙の袋が、並んでいます。

「母親が、この薬が一番だというのでな。お代はここに置く。」
さむらいは、薬を一袋とりあげ、お金を置いて店を出ていきました。女の人も風車を拾って、のれんをくぐって、出ていきます。

二人を追いかけるように、まりさんと森本さんは、外に出ました。そこは、すっかり江戸時代の町でした。
「えっさ、ほいさっ。えっさ、ほいさっ」

かごかきが、土ほこりをあげて、いきおいよく走っていきます。かさとつえを持った旅人たちもいます。

高田家のとなりは、八百屋。そのとなりはお寺。むかいは、古着屋、火薬屋。いろいろな店が並んでいます。

「唐橋通りはこうなっていたんだなあ。」

森本さんは、町のように写真を撮ろうと一生懸命ですが、スマートフォンが固まってしまって動きません。その前を、

「あめはいらんかいねー」

あめ屋があめの入ったかごを持って歩いて行きました。

あめ屋の後から、市役所の課長さんが小走りに遣ってきました。課長さんは、江戸時代の唐橋通りに気がついていないようです。

「きみたち、川ぞいのあきちを、駐車場にしていという許可が出た。高田家は残しておけるぞ。」

ねこまたが知らん顔して歩いてきました。

「おいらは猫の又造・・・」

と、自己紹介をしたかどうかわかりませんが、課長さんとねこまたは、古い知り合いのように並んで、通りを歩いて行きました。いつのまにか、江戸時代の人たちは消えて、いつもの町並みが残っています。

「あ、スマホが動いた。」

森本さんが写したのは、残念ながら、今の唐橋通りと、まりさんの困ったような顔だけでした。

